

小説 宮澤賢治「永訣の朝」の授業

筑波大学附属駒場中・高等学校

石川祐爾

小説 宮澤賢治「永訣の朝」の授業

筑波大学附属駒場中・高等学校

石川祐爾

「小説の授業ではなく、授業の小説——そんなものを書いてみたい。授業の流れを読み物にして、読んでゆくうちに教材の内容が自然に理解できるような——いつからかそんなモノを書いてみたいと思うようになった。これはその試みの一端である。小説ならば、様式や人物の描写にそれなりの配慮があつて当然だが、本誌の性格上、捨象した。」

生徒の机上にはB4版に印刷された「永訣の朝」がある。歴史的仮名遣いだ。行末に5・10・15と行数がついている。左下に（注）として、

・あめゆじゆとてちてけんじや……雨雪を取つてきてください。

・蒼鉛……金属元素の一つ。灰白色で赤みを帯びている。などの説明がある。

挨拶を終えた佐伯は、ゆっくりと全列に視線を向け、静かな口調で、

「では、まず詩を黙読して、読めないところはないか、確認してみよう。」と言った。

生徒はすぐに、プリントに目を走らせ始めた。やがて、「カッコの『あめゆじゆ』とローマ字みたいなの……」

『いつしやう』は？』という声がしたので、佐伯はその方を向いて、

「それは『あめ ゆじゆ とてちて けんじや』、ローマ字は『おら おらで しとり えぐも』、『いつしやう』は『いつしやう』です。漢字で書くと『一生』とゆつくり発声しながら板書した。

チョークが折れそうな力強い筆致だ。

「これで読めない言葉はなくなつたね。では朗読してみよう。この詩を六つに分けて、六人に読んでもらうので、切れ目のところに印をつけながら。では荒木君から」

荒木は、座つたまま、「今日のうちに……」と読み始めた。するとその声にかぶせて佐伯が「エイケツノアサ、ミヤザケンジ」と訂正した。

佐伯の意図が伝わらないらしく、荒木はまた「今日のうちに……」と読み出した。そんなに緊張しているのか。佐伯は、

「詩は題名と作者を最初に読むんだ」と言った。

ようやく、荒木は正しく読み始めた。七行目まで来た。

「はい、最初だけとめらかに読めたね、詩は題名も作者もちゃんと読む、いいね。では続けて、伊藤君」

伊藤は十五行目まで読んだ。

「はい、きみの声、なかなか渋いね。ここまでが②段。では次、江尻君」

江尻は「ありがたう」をそのまま発声したので、佐伯はすぐに『ありがたう』だよ』と訂正した。二七行目でストップをかけ、

「ここが③段。つぎ、加藤君」

三五行目で中断させて、

「では続けて、菊池君」

菊池は、（ ）内をつつかえながらも正確に発声した。五行目まで読んだ菊池に、

「カッコの中つてちよつとヘンな言い方だね」と語りかけると、すぐに、「方言ですか？」と答えた。

「うん、そのとおり、誰の言葉？」

「妹」と別の生徒が答えた。

「うん、いい調子だ、では最後に児玉君、五二行目から」

児玉は、「さいはひ」が読めなかつたので、佐伯は、「サイワイ」と発声しながら「幸い」と板書した。「一生」と「幸い」の二文字が白く浮かびあがつて見える。

「これで、全部読めたね。では、六つに分けたところを確認してみよう。そして、このように①から⑥まで番号をふつてみよう」

佐伯の示したプリントには、5本のタテ線の間に①から⑤の数字が見えた。

「ではこれから内容をみていこう。妹はどんな病気で、どこにいるんだろうか。ここから右側の三列の人は、病氣、ここから左側の人は場所を考えてみよう。まわりの人と話してもいいよ」

佐伯は教室全体を二つに分けた。それから上着を脱いで教卓の上に置いた。

「死にそうなんだろ」「病室って書いてあるぞ」「なんだ、青白く燃えているって?」「やっぱ、病院だろ?」などの声。

佐伯は、「妹・病氣」と板書し、その下に「どんな・どこ」と加えた。「病氣について書いてあるのは……」佐伯の声に加倉井が挙手した。

「③段の『はげしいはげしい熱やあえぎ』と⑤段の『やさしくあおじろくもえている』……」

「そうだね、⑤段の『とざされた病室』や『くらいびょうぶやかやのなか』からもわかる。高熱、呼吸困難、伝染の恐れのある病氣……」

「結核!」いちばんうしろから叫んだ生徒がいる。「えーっと、渡辺君か、よく知ってたね。」

「ぼくのおじいちゃんが戦争から帰って……」と語り始めた。周囲に笑いが起こった。このクラスの人気者らしい。

「アッ、と、きみの話、もっと聞きたいけど今日は時間がないから……では場所は?病院か、自分の家か、平山君どう思う?」

「病院だと思います、伝染病でしょ?入院してる……」

「平山君と同じように思う人?」四、五人が挙手した。「理由は?理由も同じ?」四、五人に反応はない。

「では、自分の家だと思ってる人?」二人の手が挙がった。「中西君」

「だからあ、屏風や蚊帳って病院にある?、エッ、雪とりに行くのに、蚊帳吊ってるの?蚊帳って夏じゃん」

佐伯は笑いながら、

「中西君、鋭い!たしかにちよつとへんだね。ここは、こう考えよう、屏風は冬の冷たい風を遮るため、蚊帳は夏、蚊を防ぐため。だからここは、冬も夏も暗い病室、という時間の長さ、とし子が何ヶ月も寝た

ままだと読んでみよう。で、たしかに屏風や蚊帳は病院にはないな……」

「先生!」

「ハイ、成田君」

「外に雪を取りに行くとき、茶碗を持っていくじゃないですか?それってずつと使っていたヤツみたいだから……」

「うん、②段の『これらふたつのかけた陶碗』や⑥段の『わたしたちがいっしょにそだつてきたみなれた茶碗の』というところだね。平山君、どう思う?」

「やっぱ、家かな。」

「そうだね、現実には、この家は粗末な造りで、いつも屏風や蚊帳が必要だったらしい。とにかく家の奥の静かな部屋のようにだ。ところで、兄は、『ありがとう』と言ってるね、③段で。どうしてかな」

何の反応もない。

「うーん、ちよつとむずかしいかな」佐伯はワイシャツの袖をまくり始めた。

——生徒の無反応・沈黙は、不適切な発問(教師による質問)のせいなので、修正や工夫の必要がある——これが実習生のころに教えられ、その後の研修期間に叩きこまれた教師のイロハだった。とにかくわかりやすい、なめらかな授業運びがよしとされた。が、経験年数十年を超えるころから、佐伯は、この教えに疑問を覚えるようになった。いつもプリンやお粥ばかり食べていたら、餅米や牛肉の噛み心地や濃厚な味とは無縁だし、力もつかない。毎日が日曜なら日曜の眞の解放感は味わえない。授業も同じで、そこそこの抵抗感(むずかしいという感じ)が生徒に緊張をもたらし、それを克服したときの達成感、充実感を生むのではないか。ただ、この「緊張」の程度が微妙で、そこそこ指導者の力量が発揮されるのではないか。

ダイレクトに理由を問うことをやめて、佐伯は、

「どういふことに対してありがとうっていつてんの?」と質問を変えた。

「雪を取ってきてと頼んでくれたこと」誰だかわからないが、そう言った生徒がいる。

「頼んでくれてありがとうってちよつと変だと思わない?」と佐伯。

「病室にずっといっしょにいるのはつらいだろうから、外に出れるように」というつぶやきが聞こえた。

佐伯は、「外に出られるように」と板書し、

「③段には、『わたくしを一生明るくするために』とあるね。」と書いて漢字で書いた。

「一生は、ここでは妹が死んだ後の、兄の一生、だとすると、雪を取つてくると、なぜ明るくなるのかな」

中央の生徒がゆっくり手を挙げた。自信がありそうだ。

「齋藤君」

「妹が死んでゆくときに、兄として妹の頼みをかなえてやれたという、妹のために何かしてあげたという……思い出というか……」

「そうだね、で、『ありがとう』は？」

「そういう思い出を作ってくれた妹のおもいやりに感謝して……」

「そのとおり。よく読めたね、やさしい妹の、兄の気持ちを感じた頼み、それが通じたからありがとうと言った。励まされ、元気づけられたのかもしれない。すぐあとに『わたくしもまっすぐに進んでいくから』とあるから……」

このとき、終業のチャイムが鳴った。もう五十分たってしまったのか。

佐伯は驚いた表情で腕時計を見た。

「もう少し、がんばってね、この『も』は、どういう意味？」

「妹と同じように」と、一、二人の声が出た。

「そう、妹はいままで真つ直ぐに生きてきた。その妹と同じように自分も真つ直ぐに進んでいくという決心を妹に伝えてあるんだ。いま、まさに死んでゆく妹に、ね。では今日はこれで終わります」

あつけない終了だがこれも佐伯のやり方なのだろう。

「起立、礼！」の号令がかかり、床でイスの鳴る音が続いた。

佐伯が上着を腕にかけて、出口に向かおうとすると、

「先生、宮澤賢治の家って本当に貧乏だったんですか」と渡辺が話しかけてきた。

「この詩ではそんな感じもするね、でも実際は、母屋とは別の家とし子の病室として使っていたらしい。それだけ余裕があったというこ

とだね。とし子は東京の女子大に行ってたし……経済的には恵まれていたようだ。」

渡辺は意外そうに、

「へえーっ、そうだったんだ」大きな声で言った。

佐伯はこのとき、この詩人について興味を持った一人の高校一年生が生まれたと思つた。それは間違いない自分の働きかけの結果であつた。小さな、けれども確かな手応えであつた。

※

一週間後、二回目の授業が始まった。

「もう一時間みんなこの詩を読んでいこう。この前にやったことの復習を……あ、その前にまず読んでもらおうかな。今日は一人が二段ずつ、八木君、山下君、山田君の順で」

三人が読み終えると、

「みんななめらかに読めたね。で、前の時間は、前半で、妹の病気の確認や、ありがとうの意味をハッキリさせた。兄は、妹のやさしい思いやりを知つて妹の死にくじけることなく、生前の妹がそうであつたように、正しくまっすぐに生きていこうと勇気づけられ励まされる。今日は、④段からですが、まず、雪を取ろうとして、あることに気づく、発見した、という書き方をしているところを探してみよう」

佐伯は黒板の右端に、「気がつく」・「発見」と書いた。しばらくして、

「見つけた人？」と促し、八木を指名した。

「⑤段の『あんまりどこもまっしろなのだ』と『あんなおそろしいみだれたそらからこのうつくしい雪がきたのだ』」

『……のだ』いう文末は、いま気がついた、発見したというニュアンスがあるね。」

説明しながら、佐伯は黒板の下方に、『まっしろ』『うつくしい』『さっぱり』と横に並べて書き、それを集合記号の便図のようにまるく線で囲んで「雪」とまとめた。

「これが、地上の雪を表しているとすると、この上の空や雲のことをどう書いてあるか、雲や空の様子が書いてあるところに線を引いてみ

よう」

しばらく生徒の手元を見回して、

「山田君、きみが線を引いたところを読んでみて」

「えーっと、『陰惨な』『蒼鉛色の暗い』『おそろしいみだれた』」

「よし、完璧だ。」

佐伯は、いま書いたばかりの「雪」の円の上に、『陰惨な』『蒼鉛色の暗い』『おそろしいみだれた』と書き、また丸く囲んで、今度は「雲、空」とまとめた。

「つまり、地上の雪は、まっしろでうつくしい、その上の空は暗くおそろしくみだれている。」そう言って上から下へ太い↓(矢印)を描いた。

「ちよっとわかりにくいかもしれないけど、この上に、『銀河』『太陽』『気圏』といった世界があるってことらしいね」佐伯は、「銀河、太陽、気圏」の3字をまた丸く囲んで

「これは宇宙かな」と言いながら、上、中、下の三段に三つの単語のまとまりを示した。

「この図と、③段の『わたくしもまっすぐに進んでいくから』を結びつけると、どういうことがわかるかな。この、『わたくしも』の『も』は妹と同様にわたくしもという意味だね、ところで、まっすぐ進むって簡単かな？」

「むずかしいー」という声が出た。

「中村君、どうして、むずかしい？」

「くじけるし、脚引っぱるヤツいるし……」

「実感、こもってるな。経験者か？」佐伯は笑って、あちこちにも小さな笑い声が起こった。

「そのことと、この図の空と雪と関連づけられないかな、ちよっと時間とるから、じっくり考えてみよう」

ほとんどの生徒に戸惑いの表情がでてきた。ざわついている。

「中村君が言ったくじける、脚引っぱるヤツと、『暗い空』そして、『真っすぐ進む』と『美しい雪』を結びつけて読んでみると……まだみんな黙っている。」

「人間の世界と雪をくらべてみると……」

「似ている……」誰かつぶやいた。

「山下君、どういうこと？」

「じゃまするヤツがいてまっすぐ進もうとしてもむずかしい、でもめげないちゅうか……」

「うん、雪は？」

「雪はおそろしいみだれた暗い空から来ているのに、真っ白で美しい。そうか……雪を見て雪はめげないってことがわかった。」

「そうなんだ、山下君よく気がついたね、真っ直ぐ進んでいこうと決意しているわたくしは目の前にめげない雪を発見したんだ、どう思ったかな」

「仲間うちゅうか、元気がでる」

「うん、勇気も湧いてきただろう、よし、やってやるぞって」

佐伯は、ここでゆつくりと全体を見回した。

「ところで、こういう気持ちになったキツカケは、『あめゆじゅとてちてけんじや』だ。だからこの妹の言葉は、やさしい思いやりと真っ直ぐに進んでいくぞという決意の二つのことをわたくしに呼び起こした。そういう深い意味、すごいパワーを発揮した。だから4回もくりかえされているんだ。」

佐伯の解説を、生徒は食い入るように聞いている。なかでも中西の両目はかすかにうるんでいるように見える。

「⑥段の『うまれでくるたてこんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあよにうまれてくる』で、注を見ると、『こんなに自分のことばかりで苦しまないように』とあるけど、これって、どういうことかな？」

中西が手を挙げた。

「人のために苦しむ、人のためにいっしょに悩む……」

「うん、自分のことだけで苦しむのではなく、すべての人の幸福のために苦しむような生き方をしたいってことだね。これって⑥段の『おまえとみんな』の『みんな』に似ているね。わたくしも妹もみんなの幸せを願っている……」

「ここまで言って、佐伯は腕時計を見た。終業まであと十分ほど。」

「いままで確かめてきたことを思い出して、もう一度、ここでじっくり全体を黙読してみよう」一瞬、教室が静寂に包まれる。佐伯はこうした沈黙の時間が好きだ。

⑥段の、『雪がアイスクリームになる』ってあり得る？

「ない」、「あり得ない」の声のなかに、

「あるかもしれない」と言った生徒がいる。

「長谷川君、どうして？」

「天上だから、なんともいえない、あるかも……」

「うん、よくわからない。でも、かなりむずかしそう。なのに、『わたくしはすべての幸いを賭けて願う』と言っている。自分のすべての幸福と引き換えにしてもということだけど、たとえば、『辛い』の具休例を挙げてみると……」

やや間があつて、

「健康」、「五体満足」という声があった。

「それに、将来、すてきなお嫁さんがくるとか、仕事が順調にいくとか……雪がアイスクリームになるならそんなもの捨ててもいい、という祈り、願いなんだ、すごいね。」

佐伯は、机上からはがきの大きさの紙を取り上げ、前列の生徒に数枚つつ配り始めた。

「では、最後に、『けなげな』という言葉にこだわってみたい、漢字で書くと……」と言いながら、「健気」と板書した。そして、「年少、弱々しいにもかかわらず、困難なことに勇敢に立ち向かう様子」と続けた。

「妹の、どういうところが健気か、できるだけ多く、箇条書きにしてみよう。あとで、みんなが書いてくれたものをまとめてコピーして配ります。それをこの授業のまとめにしたいのでしっかり書いてください」

五・六分ほど経過し、書き終えた生徒と佐伯の目が合った。

佐伯は「書けた人は提出して、終わりにしてください」と言った。一人の生徒が近づいてきて、

「まがった鉄砲玉ってどういうことですか」と質問した。

「わたしもよくわからないけど、病室から廊下に出て、そこから庭に降りて、という動きの速さ、早く雪を取ってきてあげようという気持

ちを表しているんじゃないか」と答えた。

生徒は納得したようだった。別の生徒が、

「ぼくが調べた本には、妹は実際は夜に死んだと書いてありました。なのになぜ、永訣の朝なんですか」

「わたしも不思議に思う。ただ、この詩には、『わたくしも真つ直ぐに進んでいくから』とか雪がアイスクリームになつてとか、将来、妹が死んだあとの決意や祈りも込められているから、それには一日の始まりの朝がふさわしいのではないか……きみはどう思う？」

「ぼくもそう思います。詩は記録じゃないから事実じゃなくてもいいんですよね」

ここで、終業のチャイムが鳴った。

生徒が提出した箇条書きの主なもの。

- ・ 死の直前なのに兄を気遣い、頼み事をして、自分の死後の兄の心を明るくしようとしたところ。
- ・ 兄への頼み事を通して、悲しみにくれている状態から勇気づけてくれたから。
- ・ 病魔に冒され、死の間際だというのに兄を元気づけようとする気遣いを見せたから。
- ・ 病気という大きな障害に立ち向かい、気丈に精一杯闘っているところ。
- ・ 激しい熱や苦しみに必死で耐えている様子から。
- ・ 病魔に冒されているにもかかわらず、雪のように純粹ではかないから。
- ・ 次に生まれ変わる時は、自分のことで迷惑をかけないで、人のためになる人間になりたいと願っているから。
- ・ 生まれ変わったら他人をいたわれる人間になりたいという優しい心を持っているところ。
- ・ 作者に、汚い空から降った雪がきれいであることのきづかせてくれたから。
- ・ 暗い雲と美しい雪との対比から、負の状況からも希望を見いだせることを、わたくしに教えてくれたから。

- ・自分は一人で天上の世界に行くのだと強く決意していることがわかるから。
- ・俗世間のなかにあつても真つ直ぐに生きていけることを知っていたから。
- ・汚れた世の中に染まらず、美しい心を持ったまま必死に生きていくから。
- ・本当はつらいのに、兄のために死の苦しみや恐怖を見せないとこ
- ・自分の苦しみを隠すことで、兄を悲しくさせないようにがんばっているところ。
- ・最期に雪を望むように、美しい自然を愛しているから。

厳密に言えば、後半のいくつかは詩から直接読みとれるとは限らない、と佐伯は思う。が、詩の鑑賞には柔軟性も必要だろう。高校一年生がここまで読めたという記録の意味からも削除しないでおう。

〔付記〕 二二の数詞の暗示するもの

「わたくし」は茶碗を二つ持って外に出た。なぜふたつか、ひとつで十分ではないか。四十年以上も昔、凡庸な高校生だった佐伯はそう思った。幼稚な疑問だが、ずっとしこりのように残っていた。

その証拠に、といつては変だが「雪のひとわん」・「さいごのひとわん」のような詩句がある。この詩人らしからぬ用語法の不統一というか、ある種の混乱があるのではないか。(いや、この混乱は、妹の死を目前にしているという生涯の一大事を描くとき、むしろ必然的な取り乱した姿として読み手に迫ってはこないか。)

ところが教員になって、必要に迫られてこの詩の解釈を進めるうちに、その疑問に解決の薄日が射してきた。

「雪のひとわん」・「さいごのひとわん」は、数詞というよりはむしろ一つのこと、一つのものを取り出して特定するとき用いる言い方なのではないか。例えば、「それも一つの考えだ」のように。

事実としては、(現実には)ふたつ茶碗を持って出た。これは想像だ

が、それをそのまま詩に書いたのではないか。注目したいのは詩のなかに「ふたきれ」「二相系」となおも「二」が出てくる点だ。「ふたきれ」は、ひとつには右脚、ひとつには左脚を踏み台にしている姿が浮かぶ。

「二相系」には、そうであることへの確かな驚きが込められている。そうした個々の意味とは別に、繰り返される「二」という数詞イメージを、詩全体のなかで見直してみると……

この詩の「わたくし」と「妹」とはいうまでもなく二人。けれど妹の死によって「わたくし」は取り残され、一人になる。その欠落、喪失感。二人が二人として存在した日々(本然としての毎日)は瓦解する。無限の悲しみ、圧倒的なさびしさ。

恋人を失った者は、それを持つ人を見て、あるいは、生涯、子を持つことのない婦人は、公園で遊ぶ子らを見て、自らのかくある姿・人生を痛切に認識するだろう。「彼」にあつて「自分」にないものにわかにクローズアップされ、それが修正ややり直しの効かないものとしてあらためて目の前に提示される。その事実の、臍腑をえぐるしみ入るようなつらさ。

「二」は、こうした構図をほとんど無作為のうちに、その結果として読み手に示しているのではないか。

これとまったく同様の構図は、齋藤茂吉「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」に見られるのではないか。